

書 評

ガロア—天才数学者の生涯

加藤文元 著，中公新書，2010年

高知大学理学部
土基 善文

大学で、特に代数学を学生相手に教えていると、ガロアの日々を想像せずにはいられない。ガロアが君たちの年頃にはね、などと説教の一つも垂れたくなくなるころだ。ただしそこで全く別のジョークを思い出して我に返る。ちなみにそのジョークはオチだけいようと、「そう?そしてあんたの年には、リンカーンは米大統領だったんだね。」だ。

ガロアにはそんな特別な思い出がある。それを胸にこの本を読む。いや、読ませていただく。一読してまずその筆致の老練さに驚く。まるで一級の文学者が枯れた様子で淡々と、しかし上手に書いているような文章だ。「中公新書」らしい文章で、筆者が数学者であることを忘れてしまいそうになる。

そう言えばガロアってどんな家庭で生まれたんだろうか。フムフム。親は結構インテリだったんだ。便利だね。この本。辞書として使える。仔細に書いてあるのだ。もっとも、辞書として使われたのでは著者は怒るだろう。すぐれた文芸作品なのに。ついでに言うと辞書の方も怒る。同じ内容を wikipedia に貼ったら「独自研究」のレッテルをたくさん貼られてしまいそうだ。そう。この本には著者一流の独自の見解、考察も数多く見受けられる。しかしそれは周囲の状況や、数学に関する部分に限られ、ことガロアの心情に関しては驚くほど客観性を保とうとする意図が感じられる。まるで本屋の店主が、勧めたい本があるのをグッとこらえて慎み深く小椅子に座っているごとくだ。とくに、手紙などの「書かれた文章」を除いては、本書ではガロアは一言も発していない。いやいや。喋っているね。「ルイフィリップに」と発し、続いてそれに対する裁判での自己弁護では喋っている。だが、本題、数学、とくに現在ガロアの理論として知られているもの、に関しては一言も発していないのだ。いくらノンフィクションと言えども、ここまでストイックにならなくても良さそうなどころである。たとえば高木貞治先生の手にかかれれば、こんなふうだ。

内気なアーベルは隠忍したが、高慢なガロアは咆哮した。(近世数学史談より。)

それにしても、咆哮した、とはまた勇ましいね。私の知る中で咆哮したことのあるのはガロアか「としょかんライオン」ぐらいのものだ。とはいえ、このところ、高木先生の文章を読み進んできた人ならおもわず、「そうだ、咆哮しろ、ガロア」、などと叫んでしまいそうなどころ。(もっとも、そのさまをみて筆者の高木先生はニヤリと笑ってそ

うだ。そんな風情がありますがね。)ところが本書ではそのような場面でも冷静なメガネ君のト書きが入るのみである。場面は異なるがそのような部分をちょっとだけつまんでみようか。

当時のアドミッション・ポリシーに照らして相応しくない学生であったガロアが、全く順当に不合格になったという、ただそれだけののことだったと言えなくもない。(四章2の最後)

どうだい、この落ち着き払った文章は。まるで檻に入れられたライオンならぬガロアを黒づくめの正装で鑑賞しているごとくだ。読んでいるこっちのほうがフラストレーションが溜まってしまいそうだ。そうは言ってもこれも著者の目論見通り、読者にガロアと同じように不満を感じ、憤ってもらおうという腹なのかもしれない。いや、腹なのだろう。

本書ではガロアは喋らないから、代わりにこの場で喋ってもらおうと思う。例えば少年時代のガロアに喋ってもらおうか。

—どうですか、ガロアさん、いや、ガロアくん、最近楽しいですか？

「....」

意外に無口だ。それはそうだろう。親は真面目で、教養高いなら、抵抗する理由が難しい。そこへ持ってきて厳しい学校に入れられれば、最初は押さえつけに対し抵抗力が少ないから、従わざるを得ない。自然、真面目ではあるがつまらない子、の時代がしばらく続く。と、評者ならばこんな展開を考える。

しばらくすると、やんちゃなガロアの時代がやってくる。ガロアさんに聞いてみよう。—この時期になっても、灰色の雲は分厚いし、風も寒い。なかなか天気は良くなりませんね。

「ん？ だが、見よ、少し青みがかかっている、そこから白く黄色い光が見える。太陽の力のなんと偉大なことか。足元を見ると陽の光は地上にもあり、キラキラと反射している。美しい。」

—(思ったより詩人だが、目はどこかうつろだ。) 精が出ますね

「うむ。方程式の解にある『曖昧さ』が方程式の解の構造と深く関係していることを突き止めた。『曖昧さの理論』は代数方程式だけではなく、微分方程式などを扱うときにも有効だ。言うなればこれは、数学全体の変革なのだ。」

—素晴らしい。実に豊富なアイデアを感じます。貴方はきっと将来この分野の父とでも言われる存在になることでしょう。

しばらく嬉しいような、困ったような顔をした後、なぜか突然彼は激昂した。

「ふざけるな、お前なんかは何がわかる... そういえば、お前はいつぞやの....」

そのあと少し言葉を交わしたものの、会話という体にはならなかった。

...とこんなところだろうか。書いていて楽しい。このぐらゐの「遊び」があっても良さそうなものだ。だが著者はそんな乱暴なことはしない。

言うのが遅れたが、本書ではガロアが生きた時にずっと流れていた BGM としてのフランス革命、その高揚した精神、がキチンと描かれている。ガロアの親父さんはナポレオンにかなり傾倒したらしい。こういう時代はなかなか無い。なにしろ、価値観がコロコロ変わっていく。日本で言えば戦国時代から関ヶ原、あるいは戦後の墨塗り教科書の時代がそれに当たろうか。

「永遠なのか、本当か、... 見てきた物や聞いた事 いままで覚えた全部でたらめだったら面白い そんな気持ち分かるでしょう」*

と、どっかで聞いたうろ覚えの歌のフレーズがふと浮かぶ。「『不可能』はフランス語ではない」という言葉に代表される高慢さ、それと裏腹の情緒不安定さ、そして少しの暴力。この本に生きてるのはまさにそのようなガロアのような気がしてならない。つまり、ガロアはまさに当時のフランスを生きていたのだ。してみると実際のガロアは、近くにいたら結構面倒な奴だったのではないか。在学時の、物理の先生やら何やらの成績評がそれを表している。想像はまだまだ膨らむ...

このように論を展開できるのも、筆者が詳細にそのようなデータ、所見を集め、主観をある程度排しながら述べているからなのだ。高校時代の先生による人物評価などは、そのひとつだ。ここまで細かいことを頭に入れられるような日本語の書物は他には見当たらない。現代におけるガロア論のスタンダードナンバーの一つに数えていいのだろう。

最後に目次を見てみよう。最後の三章のタイトルが「1830年」「1831年」「1832年」と最後の三年間。ガロアの生涯が短かったことが感じられる。それはほんとうにあっという間の出来事だったのだ。

* 「情熱の薔薇」(作詞作曲 甲本ヒロト, 唄 The Blue Hearts) より